

---

# 幻の異世界《ハルシオン》

ムーンディ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻の異世界

### 【Zコード】

Z4201

### 【作者名】

ムーンティ

### 【あらすじ】

自他共認めるダメダメニート少年のガイルは、ある日とあるサイトから育成ゲーム「電腦獣ハルシオン」をダウンロードする。たつた一つの幻を巡り二つの勢力がぶつかり合つ戦場に巻き込まれた少年の物語。

自他共認めるダメダメーネート少年のガイルは、ある日あるサイトから育成ゲーム「電腦獸ハルシオン」をダウンロードする。

”組織”は絶滅の危機に陥つていたハルシオンを確保し、それを殖やすためサイトを通じて世界中に配つていた。

過去に一掃したはずの電腦獸が再び出現したことを知り、”青年”はもう一度、立ち上がる。今度こそ幻を完全殲滅する為に。

たつた一つの幻を巡り、二つの勢力がぶつかり合つ戦場の中、戦いに巻き込まれた少年の行く末は？

五分だけの幻。

組織。

殲滅者。

そして育成者。

四つの幻想という鍵が重なる時、幻の異世界への扉が開かれる。

ハルシオン

天空に月といひの使者が現れる夜。家の中が、しんと静まり返つていた。

家と言つてもワンルームマンションのある一部屋。

一人の少年が布団で横になつて眠つていた。

銀髪紅眼の、どちらかと言えば平均よりやや下な顔つきをした少年

本名不明で自称ガイル。

いつもなら朝になるギリギリまで起きている。のだが、一週間ほど前から23時を過ぎると同時に強烈な眠気に襲われるのでの、

それに耐え切れずに眠つてしまつ。

そして何故か決まって”同じ夢”を見る。

……そ、う。今日も見ている。不思議な夢を。

でも起きると、どんな夢だつたのかな？ という感じで、内容は覚えていない。

悲しくて辛く苦しいつて事は分かる。

何故なら起きたと”冷たい水”が頬を辿るように落ちて、心が痛むから……、

「……つ！ また”あの夢”……か」

布団の右横に置いたティッシュを取つて目と落ちた跡を拭き、体を起こす。

時間を確認するため目覚まし時計に視線を向ける。

「16:49」という数字が表示されていた。

「はあ……。今日も殆ど俺の時間が潰れだし……」

此処の所、早寝遅起きという生活リズムを神様に強制させられてんじゃないのか？

そもそも病院で診てもらった方がいいかな？ とか考へつつも、愛用してるノートパソコンを取り電源ボタンをオンにして、

今年でプレイヤー年目になるオンラインゲームを起動する。

「あと一週間くらい続いたらマジで行くか病院……けどやだなー」

他人と関わり合つを持つのが嫌いなガイルは、なるべく人と会わないようにしている。

病院と言つことは他の患者、つまり人が沢山いるところわけだからだ。

「それに……注射とか普通に嫌だし」

こちらが本音でした。

「つて病院の話は一旦中止！ 今はこれこれ……ん？ ギルメン誰もいねえ」

ギルド・サテイスファクション。

現在進行形で巨大になりつつあるガイルがマスターを務める将来有望なギルドだ。

「いや一人いたつ！ カスリアンじゃん！」

ギルドの一員でありゲーム内で一番仲が良い。  
そして勿論力スリアンとはキャラクターの名前だ。

「ああ、君かい。今日もまた君にしては遅いエニではないか

彼もガイルに気づいたらしく声をかけてきた。

「前に言つただろ？ 最近はかなり眠くて。寝ても寝たりないんだ

よ

そこでフツ、と思つ。

深夜プレイヤーである彼は普段ならこんな早めにログインはしない事に不思議に思い聞く、

「そういうお前は何してるわけ？ カスリアンにしては早くねえ？」

「……氣分転換だ、氣分転換。時に、ハルシオンという育成ゲームは知つてゐるか？」

「え？ 何そのヤバい薬の名前のゲーム？」

「知らないのなら知らないままでいい。それにこのハルシオンはラ

テン語で幻という意だ。薬の方とは無関係だ」

「ふう～ん。で、何でそれ聞いたわけ？」

「一度は耳にしたことあるだろ？ 連續PCクラック事件」

「ああ」

連續PCクラック事件……3ヶ月前からネットに接続してゐていない問わず次々とパソコンが破壊クラックされている。

原因是新種のウイルスらしいけど詳しい詳細は不明。

噂では、そのウイルスはOS関係なしで動作し、セキュリティーソフトに引っかかることもなく実行するらしい。

まあ、本当かどうか半信半疑なんだけど

「実はなクラックされたPCにはハルシオンという育成ゲームがインストールされた痕跡が有った……らしい」

「へえ～、で、ハルシオンって面白いの？ どこで落とせる？」

「たわけつ！ 今の話を聞いて僕が君に何を言いたいのかわかるだろ？」

「……見つけても入れるな、でしょ？」

「正解だ。君は危険な事に首を突っ込む趣味があるからな。<sup>ピシゴ</sup>危ない橋を渡る前に忠告せねばと思つてな。

君の行動力には感心するところもあるけれど、度を超えるなよ？」

「分かつた分かつたよ分かりました！ から過去の墓穴は掘らないでくれカスリアン副マスター殿！ といつか趣味じゅねエエエエ！」

そうカスリアンはサティスファクションの副マスター。

口調は少しきつめだが、誰にでも優しく頼りになる参謀。けれど少々サディズム属性あり自分ワールドを展開すると熱弁してしまうのが欠点。

まあ、でもここまでギルドが大きくなったのは彼のおかげでもある。

「それにあの時は仕方なかつたんだって……」

「ああ、承知してる」

「ホントかよ？」

「よし。忠告はした。今日はもう落ちる。じゃあな」

「え？ 早いな。お節介は確かに受け取つたから。またな

カスリアンがログアウトしたのを確認後、

他のギルメンが来るまで狩りをして時間を潰す為に、一人じゃ無理というPT必須の上級狩場に向かう途中で

「ハルシオンだつだけかな……」

PCクラックに関係するらしい育成ゲーム型のウイルス（？）を考える。

気になる。

もし話が本当なら誰が何の目的でやっているのか?  
どんなゲームで何を育てるのか?

気になる。

何故だろうか。

「ハルシオン」の名前を聞くと心が揺れる。  
どうしてだろうか。

考えるほど心の奥底から、とある感情が溢れ出でくる。

好奇心。

「ちょっとだけならいいじゃねえの……」

ガイルは心中で共に謝罪する。

「ごめんよ、約束破る。だつて”好奇心には逆らえない”。

- - - - -

その夜。22時頃。ガイルはまだ部屋の中でパソコンを弄っていた。

正確には次から次へと色々なサイトを観覧、つまりネットサーフィンをしている。

もちろん”あるゲームを探す”ために、だ。

「見つからないな……育成ゲーム”幻”の”い”の字も”ま”の字  
も出ないし

数時間前に友から忠告を受けたゲームプログラム。

そうハルシオンという育成ゲーム。

「はあー、やつぱりねえな。メールみて寝よつと……ってあれ?」

メールボックスを開くと一通のメールが届いていた。

開いて確認する。

怪しいタイトル。

一行だけの短い内容。

件名【 Halcyon 】

本文【 Click here to download 】

「ははは、まさかなあ。でも、もしかしたら……」

リンクをクリックしてダウンロードウィンドウが現れた。  
少し驚きながらも、デスクトップに保存する。

圧縮されたファルダを解凍して、中にある実行ファイル。

Halcyon.exeを起動した。

- - - - -

『この度は”幻”をダウンロードして頂き、ありがとうございます』

開いた窓の中に広がる、黒で塗りつぶされた世界に、機械的な女性の声でアナウンスが響いた、

『そして、もう一つの世界によつてそつらつしゃいました』

響く声に少し遅れ、世界に一文字ずつ白い文字が書き加えられて行く。

『ではプレイされる前に、私から救世主であるはずの貴方に』

ゲームの操作方法だろうか。キーボードやマウスによるゲーム内の動かし方を説明している。

『 それでは本題に移ります。』の田的は、とても簡単

刹那、ほんの一瞬だけ周りの空氣が下がったような氣がした。氣のせいだろ。うん、氣のせい。

『世界を”拒絕”するハルシオン。三つの行動を駆使して、彼に世界を”認めさせる”事』

物語の重要なキーワードなのか？

それとも作者は自分は偉いぞと自慢したいのか？

”かみ”の文字だけ太字と赤色で描画されている。

『おつと、あんまり”時間”がございませんので、メインプログラ

ムに移らせて頂きます。よろしいですね？』

左クリックボタンを押し、話を進める。

『 それでは、良き幻を……』

真っ黒な世界という名の画面の中の前方に光る点が生まれた。光はドンドンと強く輝きだし闇を塗りつぶすと、世界が反転した。闇ではなく光が。黒ではなく白が支配する世界へと。

画面の右上には0からカウントアップする数字。

そして世界の中央に、画面から見れば真ん中に”丸い何かがいる”。たぶんこれが、育成対象の”電脳獣ハルシオン”。

かみ  
むすなのが、ついにかいつのロマンだけで知恵を絞つて世界を認めさせる

「これ何処の分類にカテゴリーされるクソゲ?」

「噂になつたり事件になつたりするくらいの育成ゲームだつたから、かなり期待してたんだけどなあ」

そう言いながら数値が16になつた瞬間。窓の終了ボタンを押す、

「つまらん。はい、クソゲは『』箱に直行しようね」

と「」箱に入れ、右クリックで「」箱を空にする」で完全削除。

「ふあ～……そろそろ眠くなつてきたし、寝よ」

ガイルはまた夢を見る。

一週間連続して同じ夢かな見えた

けれど何故か今日は不思議と、少しばかりだが内容を覚えていた。

窓も扉も換気口もなく。真っ白な壁に、真っ白な床と、全てが白一

色に染められた部屋。

その部屋の中心に巨大な机が置かれていた。そして向きあうように

椅子に座る一人。

一人は銀髪紅眼に痩せ氣味の体つき、どちらかと言えば平均よりやや下な顔つきをしたメガネをかけた少年。

ガイル。良く見ると彼の隣に羽が生えた丸い生物が浮いていた。

（ハル……シオン？ 何で俺と？ つーか、ここはどこだ？）

もう一人は、黒髪黒眼の全身黒一色で統一された服を着ている。

（あいつは誰？）

性別や素顔は分からぬ、闇を纏つていてるみたいに目視できない。ただ分かるのが、”黒い”という事だ。

一人に漂う沈黙の空氣。それを壊したのは、黒い人の一言、

「遊ぼう」

（つー）

世界が点滅した。

白、黒、赤、黄、緑、赤、青、と次から次へと新しい色で塗りつぶされた世界という黒板。

ガイルの視界に展開した光景は

「……つー！ はあ、はあ……夢か」

見慣れた自室だった。手を頬に当てるど、いつも通りに”冷たい水”が通つた跡があつた。

「夢、覚えてる。でも」

何であれで心が痛むんだ？　さすがにおかしい。

夢の中の三人の登場人物。ガイルとハルシオンと黒い人。

他にも”何か”ある。

布団から立ち上がり、時計をみて時間の確認。「23：15」と…。

「えっ？　ちょっとまってよ。確か22時前に寝たから、一時間ち  
よいしか睡眠とつてないことになるじゃねえか。今まで早寝遅起し  
てたからかな？」

まあ、いいやとこれでオンラインゲームする時間が増えると駄目、  
PICOをつける。

そこでフット、デスクトップに”あるはずのないモノ”に気づいた。  
それは、

「ハルシオン？　そんな削除したはずなのに……何であるわけ？」

本当に削除したあのゲームなのだろうか。

ガイルはファルダを開き、中にある実行ファイルを起動させる。  
開かれた窓内の画面。その右上に”16”と表示されいる。

「なつ！　ちよ、どうなつてんの？　これ？」

普通に考えて、これはあり得ない。

何故なら、ハルシオンをデスクトップに保存したときに、  
そのフォルダ全体に”とある制限”を掛けた。

ネット接続、ファイル操作やレジストリなどの書き読みをだ。  
つまりゲームのセーブは出来ないという事。

だけど、現に今。

完全削除したはずなのに、セーブロードをするのは不可能なのに。

削除される前の状態に戻っている。

刹  
那

「遊ぼう」

夢の中で聞いた声、低い声が部屋全体に響いた。  
はっきり、とだ。

ガイルは目を見開き、凍りついたように動きの一切が止まつた。視線の先にあるPCの画面。その中に、

『ガイル……遊ぼう』

と白い文字で書かれていた。

卷之三

最初は誰もが思いもしなかつた。たつた小さな出来事だつたから。

けれど、その小さなことが、

少年の運命の歯車を狂わせた。

# 夢と幻が、

現実ではない—一つの存在が交わり。

後に多くの生命を巻き込む大事件の引き金となる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4201j/>

---

幻の異世界《ハルシオン》

2010年10月15日21時51分発行